

【発表概要】

本発表は、近年拡大している宗教のインターネット利用について、CMC空間とは宗教情報を配信する道具であるのか、それとも宗教実践を行う環境であるのかという問題意識に立ち、インターネット開発思想と当時の文化的思潮に焦点を当てたものである。特に、カリフォルニア州で開発され、インターネットの前身とされるARPAネットの開発・設計思想を概括し、同時代的・同一地理的に共有された「カリフォルニアン・イデオロギー」と呼ばれる概念をフックにしなが、インターネットが独自の共同性を構築していった様相を論じた。

ARPAネットの設計者であるJ. C. R. リックライダーとR. テイラーは、共にアメリカ南部出身・牧師の息子・音響心理学を専攻し、M. マクルーハンの思想から影響を受けていたことが知られている。彼らの抱いていた設計思想は、ARPAネットが始動する1年前の1968年に共同執筆された「コミュニケーション・デバイスとしてのコンピュータ」に見ることが出来る。この論文では、ネットワークがデータなどを共有するシステムと言うよりも、コミュニケーションを助長し、コミュニティを形成するために用いられる旨が書かれ、「地域性ではなく、共通の関心に基づくコミュニティを創る」ことが強調された。今日にも通用するコミュニティとしてのネットワーク、情報格差問題、電子民主主義などというトピックがちりばめられた論文である。

そうしたコンピュータ・ネットワークが一般に膾炙するのは1970年代後半以降のことであるが、60年代から70年代に掛け、同じくアメリカ西海岸地域において「カリフォルニアン・イデオロギー」と言うべき思潮が共有されていたとバーブルックとキャメロンは提起した。彼らは、対抗文化が隆盛したこの時期のイデオロギーを、先端情報技術と自由主義的個人主義を結び付けた「ハイブリッドな宗教」と解釈している。この時期、多くのヒッピーらが自然への回帰を掲げたことが知られているが、そのヒッピー文化のバイブルとされた『Whole Earth Catalog』を刊行し、現在も活躍しているスチュワート・ブランドは、禅やLSD、神秘主義とテクノロジーを融合させる活動を展開していた。彼はカリフォルニアン・イデオロギーを体現している人物と言え、前掲書は今日におけるインターネット・コミュニティの役割を果たしたと語っている。こうしたテクノロジー信仰の中、1978年に最初期のBBSが開発された。その最初のテーマは「旧来の宗教に取って代わる新しい宗教」であり、冒頭句は「私たちは神のようなものだ」だったという。ここにおいて、宗教という「共通の関心に基づくコミュニティ」が創始されたと言えよう。ただし、それは時として大衆文化と気軽に結び付きながら展開する緩やかなコミュニティである。

宗教研究において取り沙汰されるニューエイジ運動あるいはスピリチュアリティと呼ばれる領域では、その”Do it yourself”や”Back to nature”といった精神が着目されることが多い。しかし、各種テクノロジーとの融合を標榜する集団もまた、連綿と存在していること

が指摘出来るだろう。今日、リックライダーらがインターネットに求めた「共通の関心に基づくコミュニティ」の構築は実現している。そのコミュニティの凝集性は伝統宗教のそれに較べるべくもないかも知れないが、宗教の周縁に位置する人々を緩慢に取り込むだけのインフラを備えていると言えよう。それが宗教実践を行う環境となるかは未知数であるが、現実地理的な空間と CMC 空間との境界が融解しつつある現在、注目すべき対象と云い得るだろう。

【質疑応答】

Q. 「地球村 global village」概念に関して、マクルーハン自身は必ずしもオプティミスティックな見解をしてはいなかったと思うが、インターネットの隆盛が「地球村」を実現したと果たして言えるのだろうか？

A. 改宗カトリックであるマクルーハンは敬虔な信仰態度を持ち、中世教会を理想に掲げていたと言われている。当初はメディアが創り出す空間に皆が集まるという意味で理想の具現化を夢想していたが、後期には自身が思い描いていたものとは異なったメディアの発展に失望していたと言われる。初期マクルーハン風と言えば「地球村」は「世界全体が 1 つの村になる」といったものだが、今日「地球村」という場合はむしろ、「地理的な垣根を失い、地球規模で個々の村々が林立する」という状況を想定できるだろう。そのため、マクルーハンが当初述べた「地球村」概念とはいささか状況を異にしていると言える。

Q. インターネットによって「緩やかな共同性」が実現していると言うが、その匿名的空間で引き起こされる事象は社会にどれほどの影響を及ぼすものか、可能性を提示いただきたい。また、インターネットが創り出す「緩やかな共同性」から逃れたいという欲求は生じないのだろうか？ 事例などがあれば教えていただきたい。

A. まず第一に、インターネットの匿名性は必ずしも強固ではないことを強調しておきたい。とりわけ 2008 年下半期以降、ネット上で犯罪予告を行った者が数多く逮捕されている現状を見れば、ネット上での匿名性は「ただ可視化されにくい」だけだとわかる。むしろ行為（書込など）のログが残る分、いわゆる「監視社会」に寄与するものだという議論もされる。また、“mixi”や“MySpace”に代表される SNS では、プロフィール詐称に対する規制が厳しくなっている状況もおさえておく。その上で指摘できるのは、インターネットで会する個々人は、緩やかな繋がりながらも近い志向性を有しているという点である。ネットは広大で、あらゆる可能性を内に孕んでいるとも言われるが、その実、自身の興味・関心に従って、参照するトピックが限定的な事柄へと収束することは皆さんも経験していることかと思う。法学者サンスティーンは、同質的集団で意見交換がなされると議論が偏向するという「集団分極化 group polarization」を指摘しているが、この指摘は先の特質と大いにリンクするだろう。社会全体を揺るがすような事例は思いつかないが、少なくとも、「自殺系サイト」と呼ばれる場所で知り合った名も知れぬ人同士が心中に至るといった深刻な事例、あるいは巨大掲示板「2ちゃんねる」で「祭り」と呼ばれるような、多くの人を煽動する運動が日々行われていることは注目して良いと思う。

また、こうした「緩やかな共同性」を拒否する者としては、その代表にアーミッシュが挙げられるだろう。日本ではあまり知られていないが、彼らはいわゆる原始共同体を営み、電気や通信機器などを遠ざけた暮らしをし、基本的に自給自足の生活をしている。

【謝辞】

他、幾つかの有益なご質問・コメントを頂いたこと、ならびに発表の機会を与えてくださったことに対し、この場を借りて御礼申し上げたい。